

## 「メキシカン・スタンドオフ EAST&amp;WEST」 第1稿 細川博司

時代は2000年代の日本。埼玉県。

郊外の廃病院。深夜。

## ●登場人物

男1 有馬 背広の男。インテリヤクザ。

男2 竜胆 チーマー風。関西弁の武闘派ヤクザ。

暗転から、明転。

二人の男が立っている。

お互いに銃を突きつけ合い……

どれほど時間が経過したのか？

にらみ合い、膠着している。

竜胆の呼吸の荒く、有馬は石のようだ。

しかし、有馬の相貌には汗がにじんでいる。

やがて、

竜胆「…ほら、もうええやろ。」

引き金、引けや！

おら！ 早よせえ！ これ以上、俺に恥かかせんといてくれ！」

有馬「…」

竜胆「あんたには、俺を始末する理由がある。」

せやろ？ なんとか言わんかい！

いや、言わんでええ。ただ引き金、引いたらええねん。

せやないと、俺がハジくぞ？ あんたを」

有馬「…」

竜胆「さあ、やれや。やってくれ。あんたがやるべきなんや」

有馬「…」

竜胆「やめ、そんな目で見んな！」

撃て！俺をハジけえー！」

有馬「（食い気味で）撃てないんだっ」

竜胆「ああっ？」

有馬「撃てないんだよ」

竜胆「…やっぱそうか」

有馬「？」

竜胆「あんた、やっぱ知ったんやろ。」

せや、あのホテルの一件でやらかしたんはこの俺や。

この俺があんな女に気を取られんかったら、

あいつは、徳永は、クソっ、死んで済んだんや！クソっ！

いずれは、いやとつくにか？社長かて気付くやろ。

3億の取引オシヤカにして、

徳永を死なせたんは、この俺が、マヌケやったからやてな」

有馬「…」

竜胆「おっと勘違いせんといってくださいよ。」

社長につかまって、拷問されて殺されるんをびびってるんちゃうねや。

どうせ俺らは遅かれ早かれそこへ行く。拷問と虐殺が永遠に、ずーっと続くところや。

ダンテの神曲で知ってるか？あれは全部、ホンマの事なんやからな？

しゃあけど、ちやうんや、俺は苦痛に怯えてるんとちゃう。

耐えられへんねや…あの…社長の失望した顔を…見るのが。

俺はクズやけど…あの人には…あの人だけは…有馬さん。こわいもんなんかなかった。

こんな情けないザマ、誰に見せれる？

考えた。たぶん、生まれて初めてや、深く物事を考えた。

誰かに言えるとしたら、つまり、それは俺を、始末するべき人間や。

で、結局、それは、あんたしか思いつかへん。

あんたにやったら、始末されても悔いはあらへん、ってな。

手間かけさせて済まんけど…有馬さん、引き金を引いてくれ」

有馬「…」

竜胆「有馬さん、引き金を引け」

有馬「…」

竜胆「有馬さん、引き金を引け」

有馬「…」

竜胆「有馬さん、引き金を、いいから引かんかい！ おい聞いとんのか！」

有馬「？(は？)という顔」

竜胆「は？ とちやうねん、あんたさつきから何やねん！」

有馬「…(もう)一回」

竜胆「は？」

有馬「…(もう)一回」

竜胆「はあ？」

有馬「…(もう)一回」

竜胆「はあ？ もう一回？ もう一回やと？ マジでいうてんのか？」

有馬「…(頼む)」

竜胆「ええと、あんた、やっぱ知っとったんやろ。

せや、あのホテルの一件でやらかしたんはこの俺や」

有馬「！(そうなの？)」

竜胆「そうなの？ ちやうねん！ この俺があんな女に気を取られんかったら、

あいつは、徳永は、クソっ、死なんで済んだんや！ クソっ！

いずれは、いやとつくにか？ 社長かて気付くやろ」

有馬「？」

竜胆「じゃあから、社長ですやん！ 社長かて気付くでしょ！

3億の取引オシヤカにして、徳永を死なせたんは、この俺が、マヌケやったからやてな」

有馬「！(そうなの？)」

竜胆「だから、そうなの？ ちやうねん！

いいですか？ 社長につかまって、拷問され殺されるのをびびってるんちやうんや。

どうせ俺らは遅かれ早かれそ「」行く。拷問と虐殺が永遠に、ずーっと続くところや。

ダンテの神曲で知ってるでしょ？」

有馬「？(えっ？)」

竜胆「ダンテや！ イタリアの、詩人で哲学者のダンテや！ 神曲で知らんか？」

有馬「？(えっ？)」

竜胆「ドレの挿絵の!」

有馬「?(ドレ?)」

竜胆「グスタフ・ドレの挿絵や! あのなんか、めっちゃめっちゃシブいヤツや!」

有馬「?」

竜胆「もうええ! ダンテはもうええ!

とにかくダンテのあれは、あれは全部、ホンマの事なんやからな?

しゃあけど、ちやうんや、俺は苦痛に怯えてるんとちやう。

耐えられへんねや...あの...社長の失望した顔を...見るのが。

俺はクズやけど...あの人には...あの人だけは」

有馬「~~~~~(意識が遠のいてきた)」

竜胆「有馬!」

有馬「!(はい! 大丈夫大丈夫)」

竜胆「こわいもんなんかなかった。こんな情けないザマ、誰に見せれる?

考えた。たぶん、生まれて初めてや、深く物事を考えた。

誰かに言えるとしたら、つまり、それは俺を、始末するべき人間や。

で、結局、それは、あんたしか思いつかへん。

あんたにやったら、始末されても悔いはあらへん、ってな。

手間かけさせて済まんけど...有馬さん、引き金を引いてくれ」

有馬「.....」

竜胆「おい! ええ加減にせえよ! 普通撃つやろ! 撃つやろ普通!

「こんだけ言うてんねん! もう撃てや!」

有馬「漏れそうなんだ...!」

竜胆「撃てえ!」

有馬「漏れそうだ!」

竜胆「!」

有馬「...」

竜胆「は?...なんやて?」

有馬「漏れっ、漏れ」

竜胆「なんやて? ちょっと、それはつまり、まさか!」

有馬「小のほうだ!」

竜胆「！そ、そうスカ。小か…え？それ、いつから？」

有馬「銃を抜く直前だ…君が」

竜胆「くそっ！なんやねん！タイミング！」

有馬「…」

竜胆「ほな、俺の懺悔は」

有馬「？(え?)」

竜胆「え？やないねん！あんたぜんぜん入ってへんな？」

俺の話ぜんぜん入ってへんやろ？」

有馬「？」

竜胆「とにかく徳永が死んで、そいつは俺のせいなんや！」

有馬「！(そうなの?)」

竜胆「だからその、そうなの？って顔やめえ！」

有馬「！(へろっと舌を出す、必死)」

竜胆「ごめんね、ちやうねん！」

有馬「いったん行かせてくれないか」

竜胆「何？」

有馬「いったん、おき、おさめてくれ、もう、あっ」

竜胆「あかん、あかんあかん。便所に行きたいんか？」

有馬「もうその、壁際でいいんだ！」

竜胆「あかん！絶対あかん！」

有馬「その壁で…！」

竜胆「有馬さん、すっきりしたいんか！」

有馬「したい！」

竜胆「ほな、この俺をハジいてからにせえ！」

有馬「できない！」

竜胆「ハジけ！」

有馬「できない！」

竜胆「ハジけ！」

有馬「想像してみるんだ！あああああ！おおぅ…」

竜胆「なんやと？」

有馬「ひ、引き金を、引けば、間違いなく、私は、フルで……!」

竜胆「フルで?……!……なっ! ひっど、あんた、なんちゆうひどいヤツや!」

有馬「いや、だってそれは」

竜胆「おいふざげんな! 俺の屍がシヨンベンまみれやと?」

俺のおふくろがそれを聞いたらさぞかし鼻が高いやろな!」

有馬「怒鳴るんじゃあない! 大きな声は刺激になる。間違いなく、そっちに流れる、

フルだからな? 想像してくれ! ああああ! やばい! ああ!」

竜胆「どうした!」

有馬「想像するだけで、もう」

竜胆「やめろ! やめろ考えんな!」

有馬「銃をおろせ、とにかく、行かせてくれ」

竜胆「!」

有馬「な?」

竜胆「…」

有馬「おい、聞いているのか?」

竜胆「いいや! いいやあかん!」

有馬「あっ、いけない、うおお」

竜胆「いま、ここで、銃をおろして、あんたは用を足して戻ってくる。

そのときの俺は、きつと今の俺やない。今、俺はよつこの思いで死ぬ覚悟が出来たんや、

それが、その覚悟が鈍ってまう!」

有馬「(ほぼ同時に)ああああああ!」

竜胆「おい聞いとんか!」

有馬「全然入ってこないね!」

竜胆「くそお! とにかくあかん! 今や、今やないとあかん!

なんでやねん! こんなお前、大事なときにアンタ!」

有馬「君が私に、飲ませたからだ…ビールを」

竜胆「さっきのは、俺にとつては最後の晚餐や! 有馬さんかて、

多少酒が入ったほうが氣い楽やろ?」

有馬「これが楽だつて? 地獄だ!」

竜胆「なんでや! なんで店出る前に便所行かんかったんスカ?」



竜胆「…どやっ？」

有馬「…」

竜胆「どやー！」

有馬「あっ」

竜胆「どないやねん？」

有馬「うん」

竜胆「ハッピー？」

有馬「ちよっと、」

竜胆「ちよっと？」

有馬「ちよっと戻った！」

竜胆「マジすか！ す「いな！ ディエン・チャン！」

有馬「あっ、でもなんか(緩める)」

竜胆「離すな、そのまま離すな！」

有馬「あ、ああ」

竜胆「そうか、よっしゃ…撃て。はよせえ俺をハジけ！」

有馬「えっ、」

竜胆「えっ」

有馬「私が？」

竜胆「せやー！」

有馬「君を？」

竜胆「せや早よせえー！」

有馬「なぜだ、筋が通らない！」

竜胆「説明したやんけ！」

有馬「？(え？)」

竜胆「え？ ちやうねんその顔やめ！ そのポーズでその顔やめ！」

有馬「(指を離す)ああああっ！」

竜胆「ごめんごめん離すなあ！ 押さえとけー！」

有馬「…(押さえる)」

竜胆「オーケー？」

有馬「…」

竜胆「有馬さん、俺はな、くだらん用件のせいで徳永死なせて、

3億円を取引をしくじったんや。横浜の連中との取引や」

有馬「潮田のクソ野郎かね」

竜胆「はい、潮田のクソ野郎です。」

潮田には2人で行くと言えたんやが、俺は、10分遅れてホテルに到着した。

いつものホテルの、あの部屋ですわ。

あいつらは用心深い、2人で行くと言えたのに、現場におつた人は徳永一人や。

人数が違う、いうてな、当然疑われるわな。

徳永が潜入警官なんちやうか、てな？

いやひよっとしたら、潮田は5分は待ってくれたかも知れん。

徳永は「言うたはずや。」

ちよつと待ってくれ、相棒はじきに来る。きっと時計が壊れてるんや。

待ってる間に「杯どうや？ みたいな調子で。」

…じゃあけど俺は、10分遅刻した。

部屋の鍵は開けっ放しやった。

スツールにはグラスが3つ。そのうち一つはカラになっとった。

きつと徳永がバーボンを一気にあおったんや。

遅れて駆けつけた時は、もう遅かった。

ベッドの上で、徳永の目玉が「こちを見とった。シートも床も血まみれや…」

徳永が社長から預かった3億は持ち逃げされとった…それがタベのことです」

有馬「何故だね？ 君が時間を守らなかっただなんて、何があった？」

竜胆「ああ、もちろん時計が壊れとったわけやない…！」

有馬「話すんだ」

竜胆「麻美だ」

有馬「麻美？ あの、クラブの女か？」

竜胆「せや、ホテルに向かう最中に、麻美から連絡があった。」

続けて3回コールがあつて、4回目に電話に出た。まず悲鳴や。別に驚くことでもない。

あの子の親父が酒で暴れるのはしょっちゅうやからな。

せやけど、そのときは、なんちゅうか、いつもと様子が違ったんや。」

俺はハンドルを切って、麻美の家に向かった。

彼女は血まみれやった。

酒をやめさせようと説得したせいや、あのクソ親父が、麻美を……！」

有馬「彼女の、その親父さんは？」

竜胆「生きとる。まだ生きとる。

しゃあけど、もう二度と酒を飲むことも、麻美を傷つけることもできへん。

もう二度と、出来へん」

有馬「そうか」

竜胆「しょうもない女や。それでも親父から離れることが出来へんて、泣いてたわ。

ほんま、しょうもない女や」

有馬「そのせいで、君は」

竜胆「せや。すぐモーターに向かった。せやけど、もう遅かった」

有馬「竜胆、君は、その……その、あつ」

竜胆「？」

有馬「あつ、あつ、あああ？(エレベーターのボタンを連打するようにアゴを)」

竜胆「おい、どないしてん？ おい」

有馬「効果！ 効果が！ 効果が！(連打)」

竜胆「おい！ おいマジかー！」

有馬「あつ、あああああー！」

竜胆「がんばって！ 耐えて！」

有馬「んんんんん！」

竜胆「押さえろ！」

有馬「んはっ！」

竜胆「どやー！」

有馬「ん、うん」

竜胆「治まった？」

有馬「とりあえず、だが、時間の問題だ……！」

竜胆「よっしゃ、とにかく、話はそういう事ですわ。やってくれー！」

有馬「……」

竜胆「おい、早よせんかい！ 今度こそ引き金を引いてくれ。

俺をハジいて、あっちで用足して、社長に連絡してください。

へマをした竜胆を始末しました、で、ええんですわ」

有馬「それは出来ない」

竜胆「頼むわ！ ああ、だんだん死ぬのが怖なってきた！」

有馬「今の話は？ 誰かにしたかね？」

竜胆「いや、せやから、あんたが初めてや！

社長から連絡はなかったんか？

竜胆と徳永が帰ってこえへんて。俺は身を隠して、あんたに連絡をとったんや。

こんなこと相談できるんは、あんただけや。もうこれ以上耐えられへん、

さあ、始末してくれ」

有馬「…そうかね」

竜胆、銃を床に置いて両手を上げる。

有馬、銃を持つ手に力がこもる。

竜胆「…なあ、ちょっと、いいですか」

有馬「ん？」

竜胆「なんとかなりませんか？」

有馬「？」

竜胆「そのアゴ。その指、なんとかなりませんか？」

有馬「え」

竜胆「今から死んでいく、ちゆうのに、なんかこつアしやな。しまらんな」

有馬「…君は…君はなんなんだ？」

今さら何を言ってるんだ！ おい！ 覚悟を決めたんだろう！

死んだ後の事なぞ、どうだっていいだろう！」

竜胆「わかってまんがな、しゃあけど頼みますわ！

せめてその、引き金を引く瞬間だけ、アゴから指を離してくれ！」

有馬「無理だね！ バン！ って瞬間にフルでいってしまっだろう！」

竜胆「ああっ！」

有馬「いいのかな？ 君の転がった死体に私の尿が襲い掛かるぞ？」

きつとすい勢いだろうな!」

竜胆「ああ、目に浮かぶ、さぞかしエグい勢いなんやろなあ!」

有馬「そもそも、あっ、ああ」

竜胆「なんや!?!」

有馬「そもそも君をハジいた瞬間のシヨックに、私の膀胱が、くっ、耐えられるかどうか」

竜胆「…何言うてんねん? はっ? ハジいたシヨックやと?」

あの有馬さんが? 笑わせんといってくれ、今まであんた、何人始末してきたんや?」

有馬「何人始末してきたとか、そんな事は関係ない!」

竜胆「有馬さん?」

有馬「君を始末するんだぞ? 竜胆、何も感じないと思うのか? この私が?」

竜胆「有馬さん…!?!」

有馬「本当に、心からそう思っているのか?」

竜胆「あんた…!?!」

有馬「これ以上、くだらない事を言わせるんじゃないや、んぐぐぐぐぐ!」

竜胆「また時間切れか!」

有馬「んっは、んんはははん、んっはんん」

竜胆「くそ! ツボは! もうツボも限界か! …ん?」

有馬「んんっはん、んはん」

竜胆「んんん? んん? んっ!」

竜胆、自分のアゴに指を当てる。

有馬「?」

竜胆「なんか俺も、俺も、あれ? 催してきた。

せや! ビールを飲みすぎたのは、あんただけやない、んんん!」

有馬「んっは、んんん(一旦、用を足す?)」

竜胆「いいやあかん! くそ、俺は店を出る前にちゃんと便所、あっ」

有馬「んんんっはん(一旦、用を足す?)」

竜胆「あ、ああああああ! あ?」

有馬「んん?(何?)(」

竜胆「ホンマに効くなコレ」

有馬「んん！(でしょー)」

竜胆「あつ、でも、あくまで応急処置、ああ、あつ」

有馬「んん！ んんん！(連打しろー)」

竜胆「あ、ああああん！(アゴ連打)」

有馬「はははん、はんん！(連打連打ー)」

竜胆「んんあんんんんんん(やばいやばいやばいやばいやばいー)」

有馬「あつぷ、ううううん、ふうん！(あつちで用足そつー！その壁でー)」

竜胆「んんん、んんん(ダメだダメだ)」

有馬「もうはうんんん！(もつあつちで用を足そつー)」

竜胆「んんあ！ あんあんああん！(ダメだダメだ！ 覚悟が鈍るー)」

有馬「はふはふはふん！(無理だ、もう俺は行くー)」

竜胆「はああああああん！(ダメだあー)」

竜胆、銃を再び構える。

二人は再び、銃を突きつけあう構図に。アゴに指。

竜胆「…(荒い鼻息)」

有馬「…(荒い鼻息)」

竜胆「んんダメだ、動くなあん、んん」

有馬「竜胆はんはん」

竜胆「撃て、んあん」

有馬「フルでいってまはははん、いってしまつぞ」

竜胆「んんかまわねえ、ハジけんん」

有馬「んな、んなんだってんんん」

竜胆「ん思い出した、ガキのころ、俺はアンタの隣に並んで、

た、た、立ち、立ちションー！ した。

俺は、俺はわざと、あんたの靴に…んんションペンをー！ ひっかけた」

有馬「うんおお立ちションとかっ、言葉に気をつけるお…！」

竜胆「あんたの、おろし立ての、ピッカピカの黄色い革靴が、

うらうら、うらやましかったんや」

有馬「んな、なんの話だねえん」

竜胆「あんたは、俺の憧れやった。いつもあんたについて回って。

しゃあけど、この仕事は、俺には、向いてへんかった…

あんたに憧れて、俺がアホやったんや。

あんたの靴に、んんシヨンベンを！…ひっかけた。その報いだ。

俺をハジいてくれ、あんたの作る、みず、水、溜り、の中で、

お、俺はカツコ悪く、俺は…死ぬ。それで、ええ！」

有馬「んん竜胆」

竜胆「んもう苦しманでええ、思う存分、んん、フルでいってください…！

それから、あの女に、俺にはもつたいない女に、麻美に、伝えてください。

あの世に来ることがあっても、決して、俺を、探すな…！」

有馬「んよし、竜胆、んん数えろ、5つ数えろ」

竜胆「んああ、せやけど、その前に、お互いディエン・チャンは、やめにしましよ」

有馬「んああ」

竜胆「東洋の、い、医学の威力はエグいな、もっと早く、実践するべきやった」

有馬「んんん」

竜胆「5…4…3…」

二人、数えながらアゴから指を離す。

竜胆、両手を挙げて、

竜胆「2……1」

二人、一斉にダッシュ！ それぞれ舞台の隅へ！

がちやがちやチャックを下ろして、放尿！

竜胆「あああああああああああー！」

音楽……アメイジンググレイス。(権利クリアできるか?)

有馬「……」

有馬動く、竜胆の背後から銃口を向ける。

有馬「今の話は本当か？」

竜胆「(すつきりしたけど)あんた!？」

有馬「君が話したホテルの一件だよ…徳永の死体と、消えた3億の件だ」

竜胆「あんた、シヨンベンはどうしてん？ 我慢してたんちやうんか？」

竜胆、背を向けたまま、両手を挙げる。

有馬「徳永を殺したのは、君じゃないんだな？」

竜胆「まさか、あんた、芝居やったんか？」

有馬「社長の3億を持ち逃げしたのは、君じゃないんだな？」

竜胆「違う！ 俺やない、ホンマや！(意を決して振り向く)」

有馬「嘘をつけ！ お前は徳永を殺して！ カネを持ち逃げした！」

竜胆「違う、やってない！ 俺はやってへん！」

有馬「あの女、麻美にお前はなんと言った？ とっくに筒抜けだぞ！」

「一緒に町を出ようと！ 君はあの女にそう言った、そうだな！」

お前は社長の金を持ち逃げしようとしたんだろう！ このくそつたれめ！」

竜胆「ちやうー……！ 確かにそのつもりやった！」

認める！ 徳永から社長のカネを、俺は奪おうとした！

せやけど遅かった！ 俺は10分遅れたんや！ 潮田の野郎が！

あいつが徳永をハジキやがったんだ！

畜生、有馬さん！ 殺してくれ！」

有馬「社長、聞きいてらっしゃいますね？」

有馬、背広の内ポケットから携帯電話を出す。

有馬「ええ、もう十分でしょう、聞いてのとおりです」

竜胆「は……！ なんやねん！ くそ！」

有馬「私は……竜胆の言うことを」

竜胆「……？」

有馬「信じます。…徳永を殺していない」

竜胆「！」

有馬「ええ、もちろん、始末はつけさせます、ええ、では」

竜胆「……つづつづつ」

有馬「竜胆、私を見る！ 君が私に連絡してくることは見当がついていた」

竜胆「せやから追っ手が来んかったんか？」

いやいや違う……あんたが、そうやったんか」

有馬「社長は、君が裏切ったと信じてた。だから、とっさにひと芝居、打たせてもらった。

でなきや、君は……本気で私を撃つと、正直怖かったよ。驚いた。

たいしたものだ。君を信じよう。徳永を殺してない。

だが取引の時間に遅れたのは別だ。見逃すことは出来ない」

竜胆「礼を言うべきなんか？」

有馬「どういう意味かな？」

竜胆「あんたは、昔からそうやった。やっぱり俺をハジクのに、

あんたは躊躇せえへん。あんたは、元々、そういう人間なんや」

有馬「竜胆、立て。社長が君にチャンスをやるとの事だ。潮田を追うぞ。

奴はまだ港にも、空港にも、姿を見せていない。まだこの国のどこかに居る。

奴を始末して、奴が持ち逃げした金を取り戻す。

間に合わなければ、君は始末される」

竜胆「あんた一人で十分やろ！」

俺なんか足手まといや！ 役になんか立たへん！ もうええから、始末してくれ」

有馬「……」

竜胆「……ほら、もうええやろ。引き金、引けや！」

おらー！ 早よせえー！ これ以上、俺に恥かかせんといってくれー！」

有馬「……」

竜胆「おい！ ええからー！ やってくださいよー！」

有馬「始末しようと思えばいつでも始末できた。

いくらでもチャンスはあった。よく小便を我慢したな？

切り替える、君はチャンスをもぎとった。麻美が、君を待っているぞ」

竜胆「！？」

有馬「君はガキのころ、この私のおろしたての革靴に、小便をひっかけた。

そんなヤツはじめてだった、あのとき半殺しにしなくてよかったよ。

君は私の…大事な弟分だ」

有馬、銃をゆっくり下ろし、腰に差す。

竜胆「有馬さん…」

有馬「さあ、立て、行くぞ、その銃、弾は入ってるんだろうな？」

竜胆「ああ。あんたが撃たんかったら、ほんまに撃つつもりやった」

有馬「そうだ。君はそういう人間だ。信用できる」

竜胆「潮田をハジいて、麻美の元に戻る」

有馬「そのとおりだ」

竜胆「やったる、やったるやんけ！ 行きましょ有馬さん、すぐに出ましょ！

(銃を腰に差す)「

有馬「ああ、その前に」

竜胆「なんすか？ まだなんかあるんすか？」

有馬「…便所に…行かせてくれ」

竜胆「はい！？ え？」

有馬「実は、ずつ…と我慢してたんだ。もう…限界、だ！」

有馬、そつと「ア」に指をあてる。

竜胆「うそーん！」

劇終。